



北海道教育大学釧路校地学研究室所蔵の雄別炭礦株式会社寄贈機器・資料とその意義

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松原, 尚志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007121

北海道教育大学釧路校地学研究室所蔵の 雄別炭礦株式会社寄贈機器・資料とその意義

松原尚志

北海道教育大学釧路校地学研究室

Research on Instruments and Materials Donated from the Yūbetsu Coal Mining Co. to the Laboratory of Earth Sciences, Kushiro Branch, Hokkaido University of Education in 1970

MATSUBARA Takashi

Laboratory of Earth Sciences, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

1-15-55 Shiroyama, Kushiro 085-8580, Japan

概 要

1970年4月に雄別炭礦株式会社から北海道教育大学釧路分校（現釧路校）地学研究室に多くの研究機器・地質資料が寄贈された。当時の新聞記事から、寄贈を受けたのは研究機器・器材31点、地質調査資料149点、ボーリング日誌138点、図書466冊、航測図および空中写真等であることが判明している。寄贈から半世紀あまりを過ぎた今日におけるこれらの機器・器材、資料の所蔵状態を調査した。その結果、現存しているのは図書1冊、空中写真27枚、研究機器4点のみであることが明らかとなった。また、海外産の石炭標本18点とその展示ケースが雄別炭礦からの寄贈品である可能性が示唆された。現存する研究機器は当時の炭鉱会社の地質調査部門で使用していた研究機器を継承している数少ない例であるほか、科学技術史的にも貴重なものが含まれる。一方、石炭標本は主に1960～1970年代に閉山したドイツ・イギリスの炭鉱産のもので、資料的価値が高い。文献調査の結果、1990年代中期までは未公表の炭鉱資料が研究室に残されていたことが推定される。それ以後、2000年度の旧自然科学棟から現在の研究B棟への移転の間に、多くの機器・資料は外部機関に移管されたか廃棄された可能性が示唆される。

はじめに

釧路炭田は北海道でも有数の炭田で、かつては明治炭業株式会社、雄別炭礦株式会社（雄別炭業所、尺別炭業所、上茶路炭業所）、太平洋炭礦株

式会社などの炭鉱会社により盛んに石炭の採掘が行われ、石炭産業は漁業、製紙業とともに、釧路の経済を支える基幹産業の一つとなっていた。しかしながら、国の石炭政策の転換により、1970年までにほとんどの炭鉱が閉山となり（「釧路炭田」

研究会, 1974), その後も経営努力を続けていた太平洋炭礦株式会社釧路礦業所も2002年に閉山した(石川ほか編, 2011)。そして, 現在では, 太平洋炭礦株式会社から採炭業務を引き継いだ釧路コールマイン株式会社一社のみが釧路市沖の太平洋の海底下において操業を続けているにすぎない状況となっている。

この釧路炭田における炭鉱業の衰退に伴い, 炭鉱会社から多くの機器・器材や地質資料が放出・廃棄されたと推定されるが, 多くの場合, その行方は不明となっているのが現状である。

筆者は2013年10月の北海道教育大学釧路校への着任後, 研究室の旧式備品のいくつかの収納箱に「尺炭」の記述があることに気づいた。このことについて, 当校の周年記念誌を調査したところ, 『北海道教育大学釧路分校三十年史』に, 岡崎由夫教授(当時; 故人)による「四十五年, 釧路炭田の代表三山の一つ雄別炭礦は, 四十三年の明治炭業本岐礦の閉山に次ぎ, 半世紀の灯を消したが, 当研究室に莫大な地質資料と研究器材を残してくれた」との記述を発見した(岡崎, 1979)。しかしながら, どのような地質資料や研究機器・器材が寄贈されたかについては述べられていない。

その後, 複数の外部の炭鉱愛好家・研究者からの当資料および機器・器材に関する問合せを通じて, 北海道新聞(夕刊)釧路版1970年4月21日付に「雄別磁 貴重な“遺産”教育大へ 探知機など機材31点 極秘の資料もそっくり」の見出しの記事(北海道新聞社, 1970)があることを知った。この記事には機材31点, 地質調査資料149点, ポーリング日誌138点, 図書466冊, 航測図, 航空写真などが釧路分校(現釧路校)に寄贈されたことが述べられている。また, これらのうち, 機器・器材には航空写真用実体鏡, 偏光顕微鏡, 金属顕微鏡および探鉱用の電波探知機が含まれるとされ, 記事の写真には2名の人物とともに, 空中写真用の反射実体鏡, 現像用引き伸ばし機, 電波探知機と思われる機器が写っている。

雄別炭業所, 尺別炭業所, 雄別炭業所の三山を経営していた雄別炭礦株式会社が1970年2月27日

に閉山, 同4月23日に解散してから半世紀あまりが経過した。本研究では, 今日におけるこれらの機器・器材, 資料の現存状態を調査し, その結果を図示・報告するとともに, その地質学・地質学史, および, 科学技術史的な意義について考察を行った。

資料と方法

北海道教育大学釧路校地学研究室の研究機器・器材と文献・写真資料のすべてを調査し, 研究機器・器材については収納箱に「尺炭」の記述のあるもの, および本学の備品として未登録のもの, 文献資料については何らかの雄別炭礦寄贈資料であることを示すラベルや押印のあるものを抽出した。このほか, 北海道教育大学附属図書館釧路館の地質学関係の蔵書も検討した。

それぞれの機器・器材についてはミラーレスデジタル一眼レフカメラ(OLYMPUS Pen E-P5)で撮影し, 画像データを保存した。また, 文献・写真資料のうち, 地質図についてはスキャナー(Epson GT-X820)でスキャン後, Adobe Photoshop®でトリミング等の加工および合成を行い, 画像データを作製した。

結果

調査の結果, 雄別炭礦株式会社より寄贈を受けた1組の文献資料, 2箱27枚の空中写真資料および4つの機器が確認できた。尚, 附属図書館釧路館の蔵書には同社からの寄贈資料は確認できなかった。以下にそれぞれの資料について, 図示・解説する。

A. 文献・写真資料

1. 『20万分の1 北海道地質図(1~6)説明書』

本文献資料(図1)は1958年3月に北海道立地下資源研究所(現地方独立行政法人北海道立総合研究機構 地質調査所)から発行されたものであ



図1. 雄別炭礦株式会社尺別礮業所寄贈の『20万分の1北海道地質図(1~6)』。A: 附図「二十万分の1 北海道地質図(6)」。B: 附図「北海道鉦床区および主要鉦床分布図」。C: 「20万分の1 北海道地質図(1~6)説明書」の表紙。D: 附図「二十万分の1 北海道地質図(6)」の裏面の押印とジアゾ複写のラベル(×0.8)。E: 「20万分の1 北海道地質図(1~6)説明書」表紙への押印とジアゾ複写のラベル(×0.9)。

る(橋本ほか, 1958)。本出版物は1冊の説明書と附図として7葉の1/20万 北海道地質図(「(1)西部」(中-北部と南部の二葉);「(2)中央北部」;

「(3)中央中部」;「(4)中央南部」;「(5)東北部」;「(6)南東部」);(図1 A; サイズ各1096×790mm)と1葉の縮尺1/80万「北海道鉦床区および主要鉦



図2. 雄別炭礦株式会社尺別礦業所寄贈の空中写真と収納箱。収納箱の蓋にはジアゾ複写の空中写真一覧表とラベルが貼付され、地学研究室の紺印も確認できる。

表1. 翻刻した空中写真一覧表(太枠線内)と現存状況。灰色のセルの写真は所在不明である。

A 米軍撮影分 (1/40,000)								
箱	番号 (北から)	撮影コース	写真番号	枚数	撮影年月	撮影地域名	備考	現存状況
A-1-10	1	M-594	6-17	12	'47-10	上足寄(17)-阿寒富士-ピリカネツ-上久著呂(6)		所在不明
	2	〃	93-103	11	〃	螺湾(93)-徹別岳-茂雪裡(103)		所在不明
	3	〃	113-123	11	〃	ウコタキヌプリ(123)-雄別-中雪裡(113)		所在不明
	4	M-598	16-26	11	〃	〃 (16)-上茶路-布伏内-中幌呂		所在不明
	5	M-52-2	113-130	18	'52-5	上茶路(113)-阿寒-宮島崎-塘路湖(130)	H=15500 ft f=150.45m/m	所在不明
	6	M-674	2-13	12	'47-11	本別(2)-上茶路(13)		全て現存
	7	M-598	32-50	19	'47-10	川流布(50)-大曲-山花-遠矢(32)		所在不明
	8	M-509	47-50	4	'47-9	達古武沼(47)-阿歴内(50)		所在不明
	9	M-4-5-3	9-11	3	'51-11	恩根内(9)-岩保木山(11)		所在不明
	10	M-509	86-91	6	'47-9	遠矢(91)-上尾幌(86)	H=15500 ft f=153.10m/m	所在不明
A11-19	11	M-557	1-16	16	'47-10	仁生(16)-上音別-大楽毛(1)	11'教育大にもあり	所在不明
	12	M-1158	3-14	12	'48-8	活平(14)-霧里-庶路(3)	12' 〃	所在不明
	13	M-455	79-86	8	'47-9	釧路(79)-別保-八千代炭鉱跡(86)	13Bの東部 〃	79-81欠
	14	M-1206	73-82	10	'48-10	留真(81)-尺別-白糠(73)		所在不明
	15	M-455	70-75	6	'47-9	釧路(75)-昆布森-ポントマリ(10)		所在不明
	16	M-1205	1-8	8	'48-10	豊頃(8)-音別(1)		所在不明
	17	M-1205	2-7	6	〃	浦幌(7)-厚内(2)		所在不明
	18	M-1147	4-7	4	'48-8	新吉野(7)-十勝川河口-昆布刈石(4)		全て現存
	19	M-596	1-3	3	'47-10	長節(3)-大津(1)		全て現存
計				180枚			現存	27枚
(A 教育大保有分)								
0	M-622	152-169	18	'52-5	雌阿寒北(152)-阿寒湖-南弟子屈(169)		所在不明	
11'	M-577	1-14	12	'47-10		2, 3は欠	所在不明	
12'	M-1158	3-10	8	'48-8			全て現存	
13B	M-455	79-90	12	'47-10	釧路(09)- 仙鳳趾(90)		79欠	
—	M-588	56-62	7	'47-10	海別岳(62)-陸別(56)	1946-48	全て現存	
計				57枚			現存	26枚

床分布図」(図1B; サイズ885×622mm)から構成される。当研究室には2冊の説明書と1組の附図(「(6)南東部」のみ2葉あり)が所蔵されている。これらのうち、1冊の説明書の表紙には「尺別礫業所 総務課344.8 受付」の朱印と「45.4.6 北海道教育大学釧路分校地学研究室 釧路市城山町139 電話4局 7121番」の紺印のほか、「雄別炭礦(雄別 尺別 礫業所)委託」の青焼のラベルが貼付されている(図1E)。また、「(6)南東部」と「1/80万 北海道釧床区および主要釧床分布図」の裏面には「44.4.6 北海道教育大学釧路分校地学研究室 釧路市城山町139 電話4局 7121番」の紺印が認められる(図1D)。これらのことから、当研究室の蔵書のうち、説明書、「二十万分ノ一北海道地質図(6)」, および「1/80万 北海道釧床区および主要釧床分布図」が雄別炭礦株式会社尺別礫業所の旧蔵書であると考えられる。

2. 建設省地理調査所発行 1:40,000 空中写真

1947~1952年に米軍により撮影された建設省地理調査所発行の空中写真で、2つの印画紙用紙箱(左上にそれぞれ「A1-10」と「A11-19」の番号あり)に収納されている(図2)。箱の蓋側にはかなり退色しているものの、ジアゾ複写による航空写真一覧表が貼り付けてあり、それぞれの箱に保管されている写真の範囲が赤マジックで囲まれている。また、それぞれの箱には「45.4.6 北海道教育大学釧路分校地学研究室 釧路市城山町139 電話4局 7121番」の紺印のほか、「雄別炭礦(雄別 尺別 礫業所)委託」のジアゾ複写のラベルが貼付されている。写真は組ごとに褐色の封筒を裁断して作製した帯封で止められ、これに撮影コースを示す○囲みの番号と「雄別炭礦(雄別 尺別 礫業所)委託」のジアゾ複写のラベルが貼付されている。これらのことから、雄別炭礦株式会社からの寄贈資料であると判断される。

また、箱の蓋に貼付されている一覧を解読した結果、寄贈受け入れ当時には紙箱「A1-10」には10組107枚、紙箱「A11-19」には9組73枚、合計19組180枚の航空写真が納められていたことが判

明した(表1)。しかしながら、現存しているのは紙箱「A1-10」12枚、紙箱「A11-19」15枚の合計27枚のみであった。

B. 研究機器

アッペ式描画装置

ドイツの物理学者アッペ(Ernst Karl Abbe)により1870年代に発明された描画装置で、カメラルシーダ(Camera lucida)とも呼ばれる。本装置は顕微鏡を用いてスケッチを行う際に顕微鏡の接眼部に取り付け、可動式の鏡に反射させたスケッチ用紙の手元と顕微鏡の視野とを接眼レンズ直上のプリズムによって重複させることにより、正確なスケッチを可能とするものである(徳永, 1958)。

当研究室所蔵の装置はニス塗りの木製の収納箱に納められており、収納箱にはマジックによる「尺炭 アッペ描写器」の記述があることから、雄別炭礦尺別礫業所から寄贈を受けた機器・器材の1つであることが特定できる(図3A, B)。

本体・収納箱ともにメーカーに関する記述はなく、使用説明書も紛失している。しかしながら、装置本体の部品は全て揃っているため、単眼顕微鏡の接眼部に取り付けることにより、今日でも描画に用いることが可能である(図3C)。

ATAGO デュボスク式比色計

1854年にフランスの発明家ジュール・デュボスク(Jules Duboscq)により開発された、比色分析により溶液の濃度の定量化を行うための機器である(武藤, 1955; Warner, 2006; 図3F)。当教室所蔵の比色計のニス塗りの木製の収納箱の蓋には「ATAGO'S Duboscq Colorimeter」の手書きのレタリングとメーカーのトレードマークの焼き印が押されている。また、天板にはマジック書きの「尺炭」「比色計」の、背板上部にも「尺炭」の記述があることから、雄別炭礦株式会社尺別礫業所から寄贈を受けた機器・器材の一つであることが特定できる(図3D, E)。



図3. 雄別炭礦株式会社尺別砒業所寄贈の研究機器。A～C：アッペ式描写器。A：収納箱外側。長辺174mm。B：収納箱内側と本体。C：研究室備品の偏光顕微鏡（OLYMPUS POS型，1965年製）に装着した状態。D～F：ATAGO デュボスク式比色計。D：収納箱天板に書かれた「尺炭 比色計」の記述。E：収納箱外観。収納箱の高さ478mm。F：デュボスク式比色計本体。高さ425mm。

メカニカルステージ

メカニカルステージは顕微鏡のステージ上のプレパラートを観察する際、X・Y軸方向に定量的に微動させるための装置である。本研究室の備品の収納箱の蓋にはマジックで「メカニカルステージ 尺炭」の記述があることから（図4 A），雄別炭礦株式会社尺別砒業所から寄贈を受けた機器・

器材の1つであることが特定できる。

本機種はメーカー・機材名ともに収納箱・本体ともに表示がないため不明であり，また，使用説明書は紛失している。Y軸方向の微動装置はラック・アンド・ピニオン部を接着剤で固定してあったが，分解・整備の結果，これは微動時のガタが大きいためであることが判明した。従って，今日



図4. 雄別炭礦尺別硯業所寄贈の研究機器。A：メカニカルステージと収納箱。収納箱の高さ140mm。B～D：OLYMPUS 小型顕微鏡写真装置 PM5。B：収納箱外観。収納箱の長辺250mm。C：収納箱内側と装置の収納状態。D：1960年製 PM-5（右；筆者個人蔵）との比較。35mm コンパクトカメラ（OLYMPUS 35；1955年製；筆者個人蔵）に接続した状態。F：メカニカルステージとともに偏光顕微鏡（OLYMPUS POS型）に装着した状態。

での研究・演習での使用には耐えない状況にある。

OLYMPUS小型顕微鏡撮影装置PM5

本装置は顕微鏡での観察像を35mmコンパクト

カメラを用いて撮影するための装置である（オリンパス工業株式会社，1960；図4 E，F）。半透明膜プリズムにより一部の光路を90度曲げ、目視用接眼レンズで視野を確認しながらの撮影を可能と

している。カメラ側にはカメラのレンズと接続するためのリングがある。

本装置の収納箱にはマジック書きの「尺炭 顕微鏡撮影装置」の文字があることから（図4 B），雄別炭礦株式会社尺別砒業所から寄贈を受けた機器・器材の一つであることが特定できる。装置一式は内側に緑色のフェルトが貼られたニス塗りの木製収納箱に納められている（図4 C）。木製収納箱にはメーカーを示すプレートはないが，内側の起伏が装置とよく一致していることから，メーカー純正品であると考えられる。品質保証書や取扱説明書は紛失している。また，収納箱内側の右側には四角い窪みがあり，一部の部品（おそらく撮影用カメラ）は欠品となっている。本装置の発売時期は1951年であり（OLYMPUS, 2015），製造番号51070から同年製であることが推定できる。

尚，当研究室所蔵のPM5は筆者の個人所蔵の1960年製の同一名の装置とは基本構造は同じであるが，装置名の表記（「PM5」→「PM-5」）に加え，接眼ドロチューブ差し込み側の引き延ばし用レンズの有無や目視用接眼部の構造など，細部が少なからず異なっている（図4 D）。この相違が装置の年次改良によるものなのか，当研究室の所蔵の本装置が偏光顕微鏡での撮影に特化した特別仕様であるのかについては資料がなく，不明である。

雄別炭礦株式会社より寄贈された可能性のある その他の機器

このほか，当研究室には備品番号がない以下の機器が確認できた。

- ・ OLYMPUS 偏光顕微鏡 POS型. 「H-1」と「H-2」の2台は火災により地学研究室の設備・実験機器，標本等の全てが失われた（岡崎，1968），1965年製である。また，「H-3」と「H-4」の2台は1967年製である。
- ・ OLYMPUS 顕微鏡撮影装置 PM-7. 収納箱の内側に鉛筆書きの「1966-5」の文字がある。これらも雄別炭礦株式会社からの寄贈機器であ

る可能性があるが，納入時期や経路については特定できなかったため，ここでは記録するにとどめておく。

C. 石炭標本と展示ケース

6列3段の仕切りのあるガラス張りの木製の展示ケースに納められた18点の石炭標本セットである。雄別炭礦株式会社からの寄贈資料であることを示す表記はない。しかしながら，これらの標本のうち，13点にはタイプライター打ちのラベルまたは手書きのメモが添付されている（図5，表2）。ラベルには炭鉱名のほか，採取した炭層名と層準・石炭の種類が記述されている。

以下にそれぞれの標本番号と産出炭鉱を示す。

標本A 1 Newstead Mine：イギリスのノッティンガムシャー州のニューステッド炭鉱産。1874年開坑。1987年閉山（Collier, 2012）。

標本A 2, A 3 “British”：紐で標本に縛り付けられた紙片に青色鉛筆で「British」と書かれていることから，イギリス産の石炭標本であることが分かるのみである。

標本B 1 Zeche Diergardt：ドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州のデアガルト炭鉱産。1912年開坑。1967年閉山。

標本B 3 Zeche Consol [Consolidation]：ドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州のコンソリダチオン炭鉱産。1863開坑，1993閉山。

標本C 1 Zeche Herbede：ドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州のヘルベデ炭鉱産。1849年開坑。1972年閉山。

標本C 2, C 3, D 2, E 2, F 3 Zeche Unser Flitz：ドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州のウンザーフリッツ炭鉱産。1874年開坑，1928年閉山。

標本E 1 Schachtanlage Rheinpreussen [Rheinpreußen] 6/7：ドイツのノルトライン=ヴェストファーレン州のラインプロイセンVI/VII立坑産。1867年開坑，1971年閉山。

標本F 1 Zeche ver.[Vereinigte] Dahlhauser Tiefbau



図5. 雄別炭礦株式会社寄贈と推定される石炭標本と展示ケース。ケースの幅625mm。18点の標本のうち、10点がドイツ産、3点がイギリス産である。

表2. 展示ケース内の石炭標本のリスト。6つの列に対してA～Fの符号を、3つの段に対して1～3の番号を付け、それらの組合せを標本番号とした（本文参照）。

	A	B	C	D	E	F
1	Newstead Mine High main seam (K, 2-1, 4m) (steam coal)	Zeche Diergardt Flöz Finefrau Nebenbank (o, o-7, 75m)	Zeche Herbede Flöz Wasserbank (1-1,4m) (Anthrazit)	no label	Schachtanlage Rheinpreussen 6/7 (Pattberggeschächte)	Zeche ver. Dahlhauser Tiefbau Flöz Sarnsbank (1,0 m) (Obere Magerkohle)
2	"British"	no label	Zeche Unser Fritz Flöz C (1, 2-1, 6m) (Obere Gaskohle)	U. F. Flöz Matthias	Zeche Unser Fritz Flöz B (1,6-2m) (Obere Gaskohle)	no label
3	"British"	Zeche Consol 1/6 Flöz Helene (o,8-1,0m) (Untere Fettkohlensch.) Consol 1/6 Fl. Helene	Zeche Unser Fritz Mergel (Deckgebirge)	no label	no label	Zeche Unser Fritz Flöz Zollverein 2 (1. 6-1. 8 m) (Mittlere Gaskohle)

ドイツのノルトライン＝ヴェストファーレン州のフェレイニグテ ダールハウザー ティーフバウ炭鉱産。1860年開坑、1965年閉山。

以上のように、これらの標本は1920～1990年代にかけて閉山したドイツとイギリスの炭鉱産石炭標本の展示用セットであり、また、当研究室では外国産の研究を行っていた教員はこれまでに在籍していないため、雄別炭礦尺別砒業所の旧蔵資料

である可能性が高いと考えられる。

考 察

1. 機器・器材、資料の意義

1970年4月に雄別炭礦株式会社から北海道教育大学釧路分校に寄贈された機器・器材、炭鉱資料、図書等のうち、地質学・地質学史的に最も重要と

思われるものは北海道新聞(1970)に岡崎教授(当時)のコメントとして述べられているとおり、半世紀にもわたり蓄積されてきた地質調査資料149点とボーリング日誌138点である。しかしながら、これらの資料は筆者が着任した2013年10月の時点ですでに当研究室には残されていなかった。また、これらの資料に加え、図書466冊と航測図も北海道教育大学附属図書館釧路館への移管はなされておらず、所在不明となっている。

現存している機器・器材、資料のうち、文献資料として唯一残された『二十万分之一 北海道地質図説明書』と附図については、当研究室以外に、北海道教育大学釧路館と函館館に所蔵があり、また、全国の10の大学・研究機関にも所蔵が確認できる。このため、特に稀少な資料であるとはいえない。また、寄贈資料の国土地理院発行の空中写真については、撮影時期が1949~1952年と古いものの、現在でも国土地理院地図・空中写真閲覧サービス(<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>)において閲覧可能である上に、高解像度の画像データも購入可能である。このため、これらの空中写真の地質学・地質学史上の資料的価値はほぼ皆無である。ただし、文化地質学的観点からは、上記の地質図・同説明書も含めて、数少ない雄別炭礦株式会社の旧蔵資料であるという点で重要である。また、当教室には購入機器として、3種類計39台もの空中写真用簡易実体鏡が保管されていることに加えて、寄贈資料以外にも多数の空中写真が所蔵されている。これらのことから、寄贈資料を含む空中写真は、かつての当校の地学演習科目において、地形、地質および地質構造判別の演習で盛んに活用されていたことを示す教育資料であると見ることが出来る。

一方、現存する研究機器・器材については、二つの点で重要である。まず一つは、戦後~1960年代の炭鉱会社の地質研究部門で使用されていた機器・器材を継承している点である。釧路炭田に関する資料を展示・収蔵している施設は7つ存在しているが(石川ほか編, 2011)、炭鉱会社の地質研究部門で使用されていた機器・器材を展示して

いる施設は筆者の知る限り見当たらない。もう一つは、これらの研究機器・器材には科学技術史的に貴重なものが含まれるという点である。1950年代から35mmコンパクトカメラが一般に普及し始めるようになると、顕微鏡による観察像についても、従来の十字線入接眼レンズを用いたスケッチやアッペ式描写装置を併用したスケッチから、撮影装置とコンパクトカメラを用いた写真撮影への技術進化が起こった(富成, 1968; OLYMPUS, 2015; 長野, 2016)。当研究室に現存する描画・撮影装置にもこのような技術進化を見ることが出来る。また、デュボスク式比色計は1960年代初めまで化学分析に用いられていた機器であるが(武藤, 1955)、今日では分光光度計に置き換えられ、ほとんど用いられていない。しかしながら、比色分析法の原理を知る上では今日でも重要である(福永, 2016)。

また、今回の調査により所蔵が明らかとなったドイツ・イギリスの炭鉱産の石炭標本については、上記のとおり、1920年代から1990年代の間、とくに1960年代から1970年代に閉山した炭鉱から採取されたものが含まれ、現在での標本の入手はほぼ不可能である。したがって、これらの石炭標本は地質資料としての価値が高いと言える。

2. 釧路校地学研究室の変遷との関係

北海道教育大学釧路校は北海道学藝大学釧路分校として1949年に発足した。地学研究室は翌1950年6月に岡崎由夫専任講師の着任により発足し、1956年には岡崎助教授、吉田三郎助教授、横平弘助手の3名の教員体制となり、研究・教育環境も充実していった(図6)。しかしながら、釧路分校が四年制大学に昇格して間もない5月23日深夜に発生した火災により、分校全体の建物の半分近くが焼失し、地学研究室の設備や機器・資料は全て失われた(岡崎, 1968, 1979)。

その後、1966年3月に自然科学棟が竣工し、また、各方面からの支援を受け、図書、地質図、標本、薄片などはこの年のうちに復旧できた(岡崎, 1968)。岡崎(1968)によれば、この時の支援者・

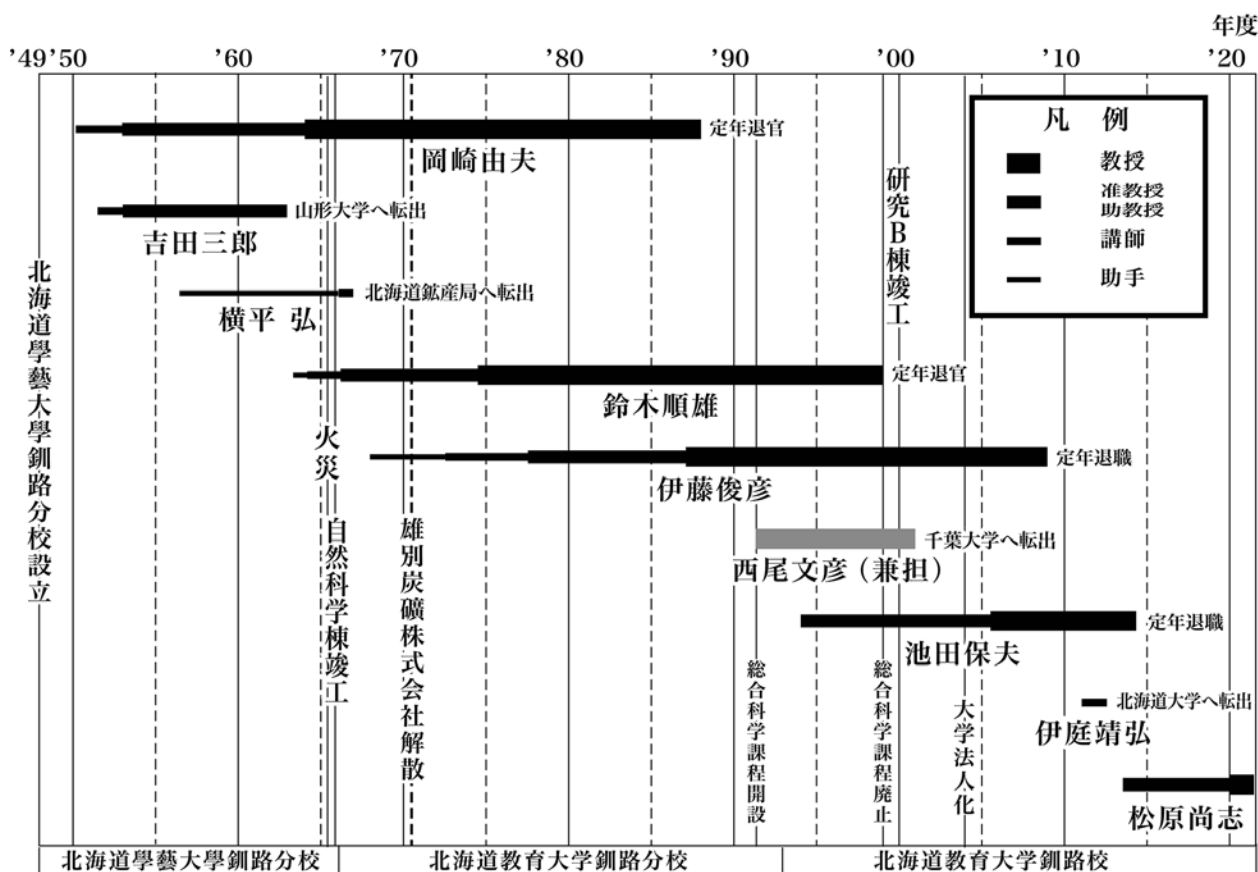


図6. 北海道教育大学釧路校地学研究室の教員の変遷と主なできごと。岡崎（1968, 1979）、鈴木（1989, 1999）などにもとづき松原編集。年度を表す縦線は年度初めを示す。

寄贈機器・資料は以下のとおりである：

- ・ 卒修業生：幻灯機 1
- ・ 地質調査所，同北海道支所：地質図幅類 37，地質調査所月報・報告 37，地質ニュース 119
- ・ 道立地下資源調査所：地質図幅 26，道立地下資源調査所報告 30，標本 21
- ・ 北海道学芸大学四分校（札幌，旭川，岩見沢，函館）：実験器具類，研究費など
- ・ 北大理学部関係者：
 - 佐々保雄教授：スライド 100，図幅 8 その他
 - 八木次男教授：図書文献類 400，薄片 180
 - 棚井敏雅助教授・浦島幸世助教授：標本 45，薄片 80。

これらのうち，文献資料の多くが地学研究室または附属図書館釧路館の蔵書として現存しているのが確認できる。

前述のとおり，その後の1970年2月27日に雄別炭礦株式会社の三礫業所（雄別・尺別・上茶路）

は企業ぐるみ閉山となり，同年4月24日には会社自体が自主解散となった（雄別炭礦株式会社編，1970；「釧路炭田」研究会，1974；石川ほか編，2011；三輪，2014）。この三山企業ぐるみ閉山後の残務整理の過程で，尺別礫業所の機器・資料はおそらく1961年に北海道大学佐々保雄教授の提案により発足した釧路地質談話会（横平，1961）の縁もあって，会社解散直前の4月6日に当研究室の岡崎教授の下に寄贈されたのであろう。尚，寄贈当時の当研究室は，岡崎教授，鈴木順雄助教授，伊藤俊彦助手の3教員の体制であった（図6）。

その後，1988年3月に岡崎教授が，また，1999年3月に鈴木教授が定年退官すると，寄贈当時のことを知る教員は伊藤俊彦教授のみとなった。その伊藤教授も国立大学法人化後の2009年3月に，また，1994年に助教授として着任した池田保夫教授も2014年3月に定年退職した。そして，2014年4月からは筆者1名のみ体制が続いている（図

6)。

このような教員の変遷の中、少なくとも雄別炭礦株式会社からの地質資料は1990年代までは地質研究室に存在していたようである。このことは藤江(1995:p.73)の謝辞において、「釧路分校では、鈴木順雄教授を訪問し、資料に関する情報や紹介の労を頂き、また、未公表の資料を含む資料の借用やコピーを入手することができた」と述べられていることから裏付けられる。

鈴木教授が定年退職した翌年の2000年3月に北海道教育大学釧路校の研究B棟が竣工すると(北海道教育大学釧路校六十年史編集委員会編, 2010), 1966年3月竣工の自然科学棟から研究機器および資料等の移転が行われた。この時の当研究室は伊藤教授・西尾文彦教授(総合科学課程兼任), 池田助教授の3教員体制であった。この間、またはこの際に、多くの雄別炭礦株式会社からの寄贈機器や資料は他機関に移管されたか、廃棄された可能性が高いと考えられる。

おわりに

所在不明となった雄別炭礦株式会社寄贈の機器・器材や資料はどうなったのであろうか? これらが他機関に移管された可能性を示唆する資料がある。それは、北海道経済部・クリーンコール調査業務コンソーシアムが2010年に発行した『平成22年度 緊急雇用創出推進事業によるクリーンコール活用可能性調査業務報告書』である(北海道経済部・クリーンコール調査業務コンソーシアム, 2010)。

この報告書(p.18~24)には道内の石炭資源に関する資料等の保存状況の調査結果が掲載されており、その中に、雄別炭礦株式会社の地質資料が未整理の状態に釧路市立博物館に所蔵されていることが述べられている。この資料をいつ、どのような経緯で同館が収集し、現在どのような状態にあるのかについては明らかではない。今後の資料整理の際に、もし、当研究室所蔵の文献・写真資料と同様に「尺別炭業所 総務課」の朱印、「45.46

北海道教育大学釧路分校地質研究室 釧路市城山町139 電話4局 7121番」の紺印、「雄別炭礦(雄別 尺別 炭業所) 委託」のジアゾ複写によるラベルのいずれか、あるいは複数が確認できれば、当研究室からの移管資料であることを裏付ける証拠となることを指摘しておきたい。

北海道新聞(夕刊)釧路版1970年4月21日付の記事は以下の文で締めくくられている:「ヤマの灯は消えても、ヤマを開いた先人の労苦と知識は、同教室に学ぶ人たちに受け継がれていくだろう」。しかしながら、半世紀あまりを過ぎた現在、当教室では貴重な地質資料の大部分が失われ、僅かな機器と資料のみが受け継がれている状況となってしまうのである。

引用文献

- Collier, B., 2012: A short history of Newstead Colliery. <https://www.nottscolminingmemories.org.uk/a-short-history-of-newstead-colliery/>
- 藤江 力(編), 1995: 釧路市の地質図. 深田地質研究所報告, (6), 1-103, 6 append.
- 福永由紀, 2016: 最新装置の仕組みを“古い”装置から学ぶ. 化学と教育, 64(4), 175.
- 橋本 互・石川俊夫・舟橋三男・斎藤昌之・長尾捨一, 1958: 20万分の1 北海道地質図(1~6)説明書. 58 pp.+6 地質図+1 鉱床区および鉱床分布図. 北海道立地下資源調査所, 札幌.
- 北海道経済部・クリーンコール調査業務コンソーシアム, 2010: 平成22年度 緊急雇用創出推進事業によるクリーンコール活用可能性調査業務報告書. 128 pp. 北海道経済部, 札幌. https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/3/7/4/8/4/3/_/CleanCoalHoukoku_h-m-1-2-3.pdf および https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/3/7/4/8/4/4/_/CleanCoalHoukoku_4-5.pdf
- 北海道教育大学釧路校六十年史編集委員会(編), 2010: 北海道教育大学釧路校六十年史. 182 pp. 北海道教育大学釧路校創立60周年記念事業実行委員会, 釧路.
- 北海道新聞社, 1970: 雄別炭 貴重な“遺産”教育大へ 探知機など機材31点 極秘の資料もそっくり. 北海道新聞(夕刊)昭和45年4月21日(火曜日)釧路版, (6).
- 石川孝織・佐藤富喜雄・坂本 元・松下泰夫(編), 2011: 釧路炭田産炭史. 23 pp. 北海道産炭地域振興センター, 釧路.
- 「釧路炭田」研究会, 1974: 釧路炭田: 資源とヤマの盛衰

- 釧路叢書 第14巻. 326 pp. 釧路市, 釧路.
- 三輪紀元, 2014: 第四次石炭政策下での雄別炭礦株式会社の企業ぐるみ閉山. エネルギー史研究: 石炭を中心として, (29), 91-96.
- 武藤義一, 1955: 比色分析法 (共立全書97). 243 pp. 共立出版, 東京.
- 長野主税, 2019: 光学顕微鏡の技術系統化調査. 国立科学博物館技術の系統化調査報告, 24, 305-402.
- 岡崎由夫, 1968: 第十三節 地学研究室. In: 北海道教育大学釧路分校二十年史編集委員会 (編), 北海道教育大学釧路分校二十年史, pp. 75-79. 北海道教育大学釧路分校二十年史刊行委員会, 釧路.
- 岡崎由夫, 1979: 第十三節 地学研究室. In: 北海道教育大学釧路分校三十年史編集委員会 (編) 北海道教育大学釧路分校三十年史, pp. 182-187. 北海道教育大学釧路分校三十年史刊行委員会, 釧路.
- OLYMPUS, 2015: オリンパス顕微鏡ミュージアム. (<https://www.olympus-lifescience.com/ja/technology/museum/micro/>)
- オリンパス工学工業株式会社, 1960: オリンパス小型顕微鏡写真装置 MODEL PM-5 [取扱説明書]. 2 pp. オリンパス工学工業株式会社, 東京.
- 鈴木順雄, 1989: 第十三節 地学研究室. In: 北海道教育大学釧路分校40周年記念誌刊行委員会 (編) 北海道教育大学釧路分校四十年史—この十年のあゆみ—, pp. 124-125. 北海道教育大学釧路分校40周年記念事業実行委員会, 釧路.
- 鈴木順雄, 1999: 地学研究室. In: 北海道教育大学釧路校50周年記念誌刊行部会 (編) 北海道教育大学釧路校五十年史, pp. 208-209. 北海道教育大学釧路校50周年記念事業実行委員会, 釧路.
- 徳永重元, 1958: 本邦炭の花粉学的研究. I. 分析法. 地質調査所報告, (177), 1-56+1, pls. 1-6.
- 富成忠夫, 1968: 機器ガイド 接写と顕微鏡写真のための用具. ファルマシア, 4(1), 49-52.
- Warner, D.G., 2006: The Duboscq Colorimeter. *Bulletin of the Scientific Instrument Society*, (88), 68-70.
- 横平 弘, 1961: 「釧路地質談話会」の発足と歩み. 釧路市郷土博物館々報, (120), 149-151.
- 雄別炭礦株式会社, 1970 (編): 概況説明 昭和44年10月. (4)+17 (雄別炭礦株式会社 雄別)+17 (雄別炭礦株式会社 尺別)+(雄別炭礦株式会社 上茶路) 26 pp. 雄別炭礦株式会社, 東京. (釧路市立中央図書館蔵; ジアソ版)

(釧路校教授)

